

## 日記に見る宣教師ニコライの宣教 ——『宣教師ニコライの全日記』出版にあわせて

安村 仁志

### はじめに

このたび、ほぼ50年にわたって伝道し、「日本ハリストス正教会」を創設したロシア宣教会宣教師ニコライがつけていた日記の全訳が教文館から出た。筆者はそのうち日露戦争中の1905年から1908年までの部分の翻訳に携わったことから、この日記の内容、客観的意義を紹介するとともに、「宣教」を論点にニコライの宣教活動の諸側面を提示してみたい。ニコライの宣教活動およびその関連事項についての研究は近年進みつつあり、それを紹介する書もかなり出ているので<sup>1</sup>、それらも参照されたい。

<sup>1</sup> ニコライ『宣教師ニコライの日記抄』、中村健之介他訳、北海道大学出版会、2000年  
中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』(岩波新書)、岩波書店、1996年  
中村健之介/中村悦子『ニコライ堂の女性たち』、教文館、2003年  
長縄光男『ニコライ堂の人びと—日本近代史のなかのロシア正教会』、現代企画室、1989年  
長縄光男『ニコライ堂遺聞』、成文社、2007年  
高橋保行『聖ニコライ大主教—日本正教会の礎』、日本キリスト教団出版局、2000年  
ニコライ『明治の日本ハリストス正教会ニコライの報告書』、中村健之介訳、教文館、1993年  
ニコライ『ニコライの見た幕末日本』、中村健之介訳、講談社、1979年  
ドミートリー・マトヴェーヴィチ・ポズニェーフ『明治日本とニコライ大主

最初に宣教師ニコライ(イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン、1836—1912)と日本での宣教活動について最小限の紹介をしておかなければならない。サンクトペテルブルク神学大学(1857年入学)に在学中、在日本ロシア領事館附属礼拝堂付司祭の募集を知り、志願して1861年に着任した。まず日本語と日本の歴史等文化を徹底的に学び、1868(明治1)年から布教活動を行い、同年4月2日沢辺琢磨、酒井篤礼、浦野太蔵の受洗により日本における正教の初穂を得た。翌年ロシアに戻り、日本宣教を進める団体(日本伝道会社)の設立を果たした(1871年帰任)。1872(明治5)年には東京に進出し、神田駿河台に本拠を設けた。以後大主教に昇叙されるため1909(明治12)年に帰国した以外は、日露戦争中も含め日本に留まって布教に努めた。一方、漢学者で信徒の中井木菟麻呂らの協力を得ながら祈祷書および聖書(新約全巻・旧約の一部)の翻訳を行った。1912(明治45)年永眠、谷中墓地に葬られた。その時点での信徒総数は3万4千余名であったとされる。この事蹟のゆえ1970年ロシア正教会により「亜使徒・日本の大主教」ニコライとして列聖された。「亜使徒ισαποστολος, равноапостольный (ravnoapostol'nyj)」は“使徒に等しい”或いは“使徒に準じた”という意味を持つ東方正教会の称号で<sup>2</sup>、特定地域での働きに対して贈られているのは日本のニコライのほかではロシアにキリスト教を導入する上で大きな働きをした聖オリガと大公聖ウラヂーミル、アラスカの聖インノケンチイ、グルジアの聖ニーナなど限

教』、中村健之介訳、講談社、1986年  
安村仁志「日露戦争時の宣教師ニコライ及びハリストス正教会をめぐる諸問題—1905年の日記から読み取る—」、『エイコーン』(東方キリスト教会学会紀要)、第29号、2004年  
安村仁志「日露戦争期の復活大祭めぐり宣教師ニコライが直面した問題について—『ニコライ日記』から1905年の復活大祭を再現—」、『中京大学図書館学紀要(27)』、2006年  
<sup>2</sup> 正教会で「亜使徒」の称号を与えられているのは、以下の通りである。マグダラのマリア、最初の女性殉教者テクラ(外典『パウロ・テクラ行伝』によれば、パウロの弟子で多くのものを異教から改宗させた)、ヒエロポリスの聖アヴェルキウス(200年頃召天)、聖コンスタンティヌス(ローマ皇帝)と母ヘレナ、聖キュリロスとメトディオス(スラヴ世界の啓蒙者)、聖オリガと大公聖ウラヂーミル(ロシアにキリスト教を導入)、グルジアの聖ニーナ、インノケンチイ(アラスカへの宣教者)、日本の大主教聖ニコライ。

られている。その意味でニコライの働きは高く評価されているといえる。

このニコライは来日以来日記をつけていたが、それは1923年の関東大震災で焼失したとされていた。しかし、ニコライの後継者のセルゲイ主教(セルゲイ・チホミーロフ)がサンクト・ペテルブルグの宗務院へ送っていた。それを1979年ソ連科学アカデミーと日本学術振興会との研究者交換プログラムでソ連滞在中の中村健之介北大助教授(当時、現大妻女子大学教授)が、サンクト・ペテルブルグの中央国立歴史古文書館(現ロシア国立歴史古文書館)に保管されているのを発見された。以来、ソ連側の研究者(科学アカデミー、レニングラードの「北西聖書委員会」のロガチョフ夫妻)及び日本の研究者の協力を得ながら、判読、コンピュータ入力などを経て、翻訳・出版が進められた。1994年に全日記の約7分の1が抄訳の形で北海道大学図書刊行会から刊行された(『宣教師ニコライの日記抄』)。次いで2004年に全日記のロシア語原文(全5巻、4,171頁)が日本財団の助成を受け、サンクト・ペテルブルグのヒュペリオン社より出版された。その間19名が日本語への翻訳に取り組み、このほど教文館から全9巻(監修中村健之介、B5判二段組、各巻平均380頁)で出版されたわけである。

## I. 『宣教師ニコライの全日記』(教文館)について

先にほぼ50年間日記をつけていたと述べたが、最初の10年分は関東大震災の折に焼失したようで、今回翻訳されたものは現存する約40年分(1870年から1911年まで)である。

内容は以下の通りである。

### 第1巻 宣教師ニコライの全日記についての解説

1870～1880年(ロシア帰国時の日記含む)、「ロシア帰国時の日記」の  
 註解

第2巻 1881(明治14)年～1891(明治24)年8月

第3巻 1891(明治24)年9月～1894(明治27)年

第4巻 1895(明治28)年～1897(明治30)年6月

第5巻 1897(明治30)年7月～1899(明治32)年6月

第6巻 1899(明治32)年7月～1901(明治34)年6月

第7巻 1901(明治34)年7月～1903(明治36)年

第8巻 1904(明治37)年～1908(明治41)年

第9巻 1909(明治42)年～1911(明治44)年

これに、ニコライの略年譜、正教用語集、日記に登場する人名の索引、正教会布教地図が資料として添えられている。

個人がつける日記には、本人の行動だけでなく、その都度考えたことが綴られていることは言うまでもないが、ニコライの日記でも苦勞・悩み、喜び・悲しみ、憤り、不安、願いなどが率直に語られている。また、私的な“情報”が多く含まれている。そこには、一般の、公式的な情報では知ることのできないものを知らしめるものがある。一方、公開を前提にして書いたものではないため、後世読む者に意外な反応を起こさせるようなものもあろう。また、誤解も混じっていよう。ニコライの日記もそうした側面をもってはいるが、宣教師としてその都度自身の行動、身の回りの動きを記録しておくという要素が一般の日記より強く、ロシアの政府・教会への報告書作成のための記録という側面が強く見られるものと思われる。その意味で、宣教師の日記には歴史的資料としての価値もあろうが、ニコライの場合は日本でのキリスト教の活動においてプロテスタント教会、カトリック教会に比して知られるところの少ない正教会の宣教師であることから、キリスト教全体の歴史を見る上でも、一般史を補う上でも貴重なものとなっている。

具体的には、まず、北海道から九州まで日本のほぼ全域を巡回したニコライが日記に見聞きしたことを記録していることが上げられる。後に触れるが、初期の時代から各地への布教はニコライの弟子たちが積極的に行った。それも都市部というよりむしろ農村部に入っていく。そういう地域をニコライはくまなく回ったのである。そして住民の生活の様子、地域の産業などについて細かく書きとめている。それは外国人宣教師であるがゆえの好奇心からと片付けるべきではないであろう。日本語をしっかりとマスターし、さらに日本の歴史・文化などを深く学んで日本人・日本の生活について理解しようとして布教したニコライならではのことであったように思われる。

また、足尾銅山事件といった日本の“事件”についての記述もある。母国ロシアに関連した事件が日本で起こったことについては、当然のことながら

苦勞し、また苦悩したが、そのことが日記に物語られている。それは、ロシアの皇太子ニコライが日本滞在中巡査津田三蔵に切りつけられた1891年（5月11日）の天津事件であり、より苦悩したのが、帰国せず日本で迎えた日露戦争（1904-1905）であった。日露戦争期に日本に残ったニコライの記述は、戦争当事国の人間が公使等外交官不在のなかで対戦国に身をおいて、何をどのように見聞きし、どのような行動をしたのかを物語るものとして一般史にとっても貴重な価値を有する。同時に、正教ならではの事柄がさまざまな形で提示されている点でも重要である。

また、開港とともに幕末から明治に諸外国からさまざまなキリスト教団体が宣教師を派遣し、布教に努めたが、ロシアからの正教の宣教については一定の研究・資料があるものの、その独自性についてのアプローチが十分であるとはいえないところで、正教独自の宣教に関する方針や具体的進め方について日記から読み取ることができれば、われわれプロテスタント福音主義の立場にとって、何らかの教示を得られることも期待できよう。

## II. ニコライの伝道とはどのようなものであったか

### (1) 初期の宣教

日本における正教会の歴史の始まりは、1858年箱館（1869年より函館）にあることは言うまでもないが、ごく簡単に概要を述べておく。

箱館は江戸時代に高田屋嘉兵衛が拠点とした蝦夷地交易の場として栄え、松前藩の役所も置かれていた。1858年江戸幕府がアメリカを始めイギリス、フランス、オランダ、そしてロシアとも修好条約を締結したことで、箱館は開港した。早速箱館には、那覇で日本語を学んでいたカトリックの司祭メルメ・ド・カション（Merumet de Cachon）が宣教の拠点を置き、1859（安政6）年に教会を創設している（現在の函館市元町15-30カトリック元町教会）。ロシアもプウチャーチンを派遣して日本との通交を求め、1858年8月日露修好通商条約を結び、箱館に領事館を開設した。初代領事ゴシケーヴィチとともに、領事館付司祭として長司祭ワシーリー・マーホフが着任したが、二年ほどして心臓の病が悪化して帰国した。ゴシケーヴィチはロシア宗務院（国教制度の下での正教会の監督官庁）に後任の派遣を要請することになるが、その

際やがて日本でキリスト教の宣教ができる日が来ることを予測して、神学大学を終え、学問的素養も備え、人格的にも優れた宣教師としての働きのできる人物を要望した。こうした求めに応じてやってきたのが25歳の修道司祭ニコライだった。キリシタン禁制の高札が撤去され、禁教政策に終止符が打たれたのは、1873（明治6）年であった。したがってそれまでの間ニコライはその“時”が来ることに備えて、日本語の習得、日本の歴史・文化の理解に努めるとともに、ロシア本国に働きかけて日本宣教のための組織を創設していった。すなわち、1869（明治2）年初めにロシアに帰国し、約2年間宗務院や正教会の有力者に日本宣教団の設立を説いて回り、1870年4月6日（ロシア暦）「日本伝道会社（宣教団）」が設立され、伝道会社社長に任ぜられたのであった。これにより、宗務院からは毎年6000ルーブリの宣教資金が送られてくることになる（この他にも1865年に異教徒への宣教を支援することを目的に設立されたロシア正教会と民間人との組織である正教宣教協会からもそれを上回る資金が送られてくるようになる）。1871（明治4）年春に函館に戻ったニコライは翌年全国への宣教を視野に東京に出るのである。函館とプロテスタントとの関係で言えば、ニコライが東京へ出た後の1873（明治6）年末にアメリカ・メソジスト監督教会の宣教師ハリス（Merriman Colbert Harris, 1846-1921）が来日し、翌年初めより函館で伝道を開始し、函館美似教会（プロテスタント教会では、国内3番目に古いとされる）を設立した。このハリスは、1876（明治9）年8月14日（旧暦）に開校した札幌農学校の第二期生の内村鑑三、新渡戸稲造などに洗礼を施したことで知られる。

ニコライが函館にいた間は、日本人のキリスト教信仰は禁止されており、表立った宣教はできない状態にあったが、実際はどうであったのか。1865年にニコライを打ち負かさんとして乗り込んだ沢辺琢磨が最初の正教徒になった。熱血漢であった沢辺は、正教を勧めて回るものとなった。そして彼を通じて、函館にいた医師の酒井篤礼、浦野大蔵が信仰を持ち、三人は1968年5月秘かに洗礼を受けた（聖名は沢辺がパウエル、酒井がイオアン、浦野がイヤコフ）。身の危険を感じ、ニコライの指示で沢辺と酒井は函館を脱出して下北半島の大間に逃れた。浦野も宮古近くの郷里に潜んだ。

こうした関係で北海道及び東北地方には多くの教会が生まれていったので、

初期の宣教活動の実態をみるため概観しておきたい。函館が起点となるが、今日の上磯ハリストス正教会（上磯郡上磯町）は函館教会の青年信徒キリール大村徳松が最初の種を播き、伝教者ダミアン五十嵐と伝道を開始した結果、1876（明治9）年3名の受洗者が生まれたことで成立した。道東地域への宣教は明治20年代に始まった。最初は伝教学校を卒業したばかりのシモン東海林勇次郎が派遣され、1888（明治21）年に6名の受洗者が生まれて根室教会の母体ができた。釧路には1891（明治24）年修道司祭アルセーニイがモイセイ湊という信徒を伴って入り、初穂を得た。標津の教会の始まりは、屯田兵としての入植者が1897（明治30）年に洗礼を受けたことにあり（現在上武佐ハリストス正教会）、網走教会は1905（明治38）年の伝教者マクシム小畑喜三郎の派遣に起源を持つ。オホーツクに面する斜里町に教会が誕生したのは、1915（大正4）年のことであった。札幌地域への宣教は、1880（明治13）年代に入ってから伝教者により始められ、84年に毛筆の製造販売に携わる一人の熱心な信徒が定住したことで司祭の巡回が可能となり、新しい信徒も増えていった。そして1888（明治21）年8月、南1条西3丁目に、函館の小松司祭の管轄下に伝教者が専住する教会（講義所）が開かれた。小樽は、すでに信仰を得ていた信徒たちが1891（明治24）年巡回してきたニコライと修道司祭アルセーニイの指導を受け、講義所を設けたことが始まりである。苫小牧の教会は、幌向に入植してきた宮城県涌谷出身の佐羽内黄吉が1879（明治12）年沼部愛之助によって導かれ洗礼を受けたことに淵源を持つ。その子イリネイ良介が1918（大正7）年苫小牧に移住し、自宅を祈祷所にしたことで苫小牧教会が開かれた。

こうして、ニコライが東京へ出た後、後述する“伝教者”という独特の立場の伝道者と熱心な信徒たちの働きにより教会の礎が築かれていき、遠く道東の地域にまで宣教がなされたのである。ニコライに代わっては修道司祭のアナトーリイが指導した。

開港都市函館における幕末以来のキリスト教各派の活動についても概観しておきたい。

カトリックでは、1859年に上述の宣教師メルメが来たり、病人に医薬を与えたり、フランス語を教えるなどの活動をおこなった。アイヌ地区も訪れて

いる。しかし、明治に入って新政府軍と旧幕府軍との箱館戦争（1868-1869）で町が騒然となるなか、攘夷派の異人狩りもあって人々が近づかなくなると、メルメは派遣団体のパリ外国宣教会を離れて領事になり、数年後帰国した。1868年に来た宣教師ムニク、アルンプリュステもが五稜郭をめぐる戦いの中で英仏の軍艦に避難し、いずれもしばらくして函館を離れた。時を経て、1875年宣教師マランが着任し、2年間で100名余の信者を得て、聖堂建設につながったという。マランは1878年シャトル聖パウロ修道女会を招き、孤児院、裁縫塾（現白百合学園）を開設した。1884年には宣教師ベルリオーズが来て、主任司祭となり、アイヌ人伝道にも熱心に取り組んだ。関連して北海道におけるカトリック教会の展開をみると、札幌（1881年）に続き、小樽、室蘭、白老、広島、倶知安、岩見沢、旭川に教会が設立されていった。北見地区（現在北見、美幌、網走、遠軽、紋別の5教会）での伝道は最も早いところで1930年頃からで、大半は戦後である。苫小牧地区（現在8教会）では、1894（明治24）年に成立した函館司教区のもとに同年恵まれない状況にあったアイヌへの福音宣教の目的で室蘭教会が設立された。正教会の宣教が及ばなかった旭川を中心とする道央には比較的多くの教会（現在17）が設立された。函館地区には函館のほか江差、当別（上磯郡）、八雲（山越郡八雲）に教会がある。幕末から明治にかけてカトリックの宣教活動の一部が函館に及んだにもかかわらず、社会不穏の中で宣教師は函館を離れ、再び活動が始められたのは禁教が解かれたあとであった。ニコライの方はこの間領事館付司祭として守られつつやがて来ると信ずる布教のできる時を見据えて日本語と日本文化の習得、ロシア本国に日本宣教に対する支援体制を作り上げていったのである。長期的展望に立ち、慌てず、あせらず準備をしていったとでもいえようか。

プロテスタントの場合、先に触れたハリスの活動のほかでは、現在北海道に多い日本キリスト教会について言えば、仙台以北に長老派の教会はなく、北海道初の教会が函館に建設されたのは1883年であった（現在の函館相生教会）。函館師範学校の英語教師桜井ちかの夫桜井昭恵の働きによるものであった。ルーテル教会の北海道での宣教が始められたのは1916年であった。聖公会は、1874（明治6）年5月にイギリス人の司祭デニングが来函して活動を